

つくる活動を通じた，表現の広がりを追う

お茶の水女子大学附属小学校

町 田 直 樹

- I はじめに
- II 研究目的
- III 研究方法
- IV 授業実践から
 - 1 ミュージックプランに基づく学習
 - (1) ミュージックプランに基づく学習とは
 - (2) 授業の実際（平成24年度第4学年）
 - (3) 学びの履歴から考察する
 - (4) こだわりつづけた作品
 - 2 ミュージカルをつくろう
 - (1) 題材について
 - (2) 学習計画（全18時間）
 - (3) 実践の様子
 - ① 台本づくり
 - ② 音づくり
 - ③ 背景画・小道具づくり
 - ④ 歌詞づくり
 - ⑤ 本番の様子
 - ⑥ 音楽会後の子どもたちの姿
- V 今後の展望と課題

【引用・参考文献一覧】

I はじめに

本校音楽科では、長年にわたり高学年では「ミュージックプランに基づく学習」を進めている。自分で計画し学習を進めるこのスタイルは子どもたちも意欲的に学習に参加している。また、ここ数年間は「つながりを深めるミュージッキング」というテーマのもと、研究を進めている。「ミュージッキング」とは、どんな立場からであれ音楽的パフォーマンスに参加することであり、これには演奏することも聴くことも、リハーサルやパフォーマンスのための素材を提供することも含まれる。(Christopher Small 1998)

今年度、第4学年の担任となり、同時に同学年の音楽の授業も担当している。この学年の子どもたちとは、3年続けてのつきあいになるが、特に今年度は自ら音楽活動に参加していく姿が増えたように感じる。その要因を考えると、次の二つではないか。環境面の変化、自分の計画に従って学習を進められる場が保障されていること。これらのことは、子どもたちにとっては大きな変化であると同時に、自ら音楽活動へ参加しようという意識を芽生えさせたと考える。特に男児の音楽への意欲向上が4月頃から見られた。そこで、今年度の大きなねらいとして、つくる・生み出す事を活動の中心に考え、音楽には間違いはないこと、どんな音や音楽でも作品であること、この2点を子どもたちには伝えた。

このような環境下で、子どもたちのつくり出す音や音楽・他者との関わりの中で絶えず変化していく音楽は、子どもたちの表現を広げるであろうと考え、継続的にこのような場を設け、実践する。

小学校学習指導要領における音楽科での「つくる活動」は、「音楽づくり」として内容に記されている。そして、小学校学習指導要領解説音楽編（文部科学省 2008）では、音楽づくりは、児童が自らの感性や創造性を働かせながら自分にとって価値のある音や音楽をつくる活動である。とされる。さらに、児童が様々な音と新鮮な気持ちをもってかかわり音の面白さに気づいたりその響きや組合せを楽しんだりしながら、様々な発想をもって音遊びをしたり即興的に表現したりする能力及び音を音楽へと構成していく能力を高めることについて示している。（文部科学省 2008, p16）以下の表は、小学校学習指導要領解説音楽編に記されている指導のねらいをまとめたものである。

低 学 年	声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをしたり、音を音楽にしていくことを楽しみながら音楽の仕組みを生かし、自分の思いをもって簡単な音楽をつくったりすること。
中 学 年	いろいろな音の響きや組合せを楽しみながら様々な発想をもって即興的に表現したり、音を音楽に構成する過程を大切にしながら音楽の仕組みを生かし、自分の思いや意図をもって音楽をつくったりすること。
高 学 年	色々な音楽表現を生かしながら様々な発想をもって即興的に表現したり、音を音楽に構成する過程を大切にしながら音楽の仕組みを生かし、つくろうとする音楽について見通しをもって音楽をつくったりすること。

本研究においては、上表の中学年のねらいを踏まえつつ、子どもの実態にあわせた展開を心がけたいと考える。

II 研究目的

小学校4年生において、音や音楽をつくる活動を継続的に取り入れ、関わりの中どのように子どもたちが変容していくかを検証し、それがどのような表現の広がりへとつながっていくのかを考察していく。

III 研究方法

ミュージックプランに基づく学習の中での子どもの取り組みに着目し、中でも自ら作品をつくり出そうとしている子どもを数組ピックアップする。そして、ピックアップされた子どもたちの変容や関わり

を追うことから、検証していく。また、11月の全校音楽会では、自分たちでつくることを大切に、作品づくりをしていきたいと考えている。その音楽会へ向けての取り組みの中にも、つくる活動を取り入れ、子どもたちの表現の広がりを見たいと考える。また、音楽会終了後の子どもの姿を追うことから、多角的に表現を見ていきたいと考える。

IV 授業実践から

1 ミュージックプランに基づく学習

(1) ミュージックプランに基づく学習とは

自らが学習を設計する、ミュージックプランに基づく学習は、「他者の表現を味わう感性」や「自らの学習を設計し、自律的に活動していく構成力・判断力」の育成をねらいとし、これまで子どもたちの活動や感想からも効果的である事がわかっている。曲を選び、試行錯誤しながら仲間とともに演奏していくことを積み重ねる中で、質は高まる。そして、作品を他者と相互交流し、触発しあう批評空間の中で更に個々の思考を高め、よりよい表現を次に活かそうとする姿を求め続け、実践を継続している。

(2) 授業の実際（平成24年度第4学年）

毎回の授業の流れは、大きく次に挙げる3つのカテゴリから展開している。①自分の課題に取り組む（10分から15分）②発表したり、友だちの発表を聴いたりする。評価しあう（10分）③全体で歌ったり、リコーダーを演奏したりする。（15分）

(3) 学びの履歴から考察する

子どもたちは、(2)②のように、発表したり、聴いたりする活動をしている。そして、毎回発表の記録を残している。以下に平成24年4月から平成24年12月までの学習の記録の中で、自分たちでつくったと考えられる記録（該当箇所は塗りつぶしてある）を掲載する。この記録は第4学年の全てのクラスのものである。（図1～図7）

日にち	曲名	演奏形態	発表者
4/22	「かえるの歌」	木きん(ピアノ)	
4/25	「白い雲」	リコーダー	
5/2	「ドラムの歌」	ドラム	
5/9	「かえるの歌」	マリンバ	
5/16	「かえるの歌」	マリンバ	
5/23	「かえるの歌」	マリンバ	
5/30	「かえるの歌」	マリンバ	
6/6	「かえるの歌」	マリンバ	
6/13	「かえるの歌」	マリンバ	
6/20	「かえるの歌」	マリンバ	
6/27	「かえるの歌」	マリンバ	
7/4	「かえるの歌」	マリンバ	
7/11	「かえるの歌」	マリンバ	
7/18	「かえるの歌」	マリンバ	
7/25	「かえるの歌」	マリンバ	
8/1	「かえるの歌」	マリンバ	
8/8	「かえるの歌」	マリンバ	
8/15	「かえるの歌」	マリンバ	
8/22	「かえるの歌」	マリンバ	
8/29	「かえるの歌」	マリンバ	
9/5	「かえるの歌」	マリンバ	
9/12	「かえるの歌」	マリンバ	
9/19	「かえるの歌」	マリンバ	
9/26	「かえるの歌」	マリンバ	
10/3	「かえるの歌」	マリンバ	
10/10	「かえるの歌」	マリンバ	
10/17	「かえるの歌」	マリンバ	
10/24	「かえるの歌」	マリンバ	
10/31	「かえるの歌」	マリンバ	
11/7	「かえるの歌」	マリンバ	
11/14	「かえるの歌」	マリンバ	
11/21	「かえるの歌」	マリンバ	
11/28	「かえるの歌」	マリンバ	
12/5	「かえるの歌」	マリンバ	
12/12	「かえるの歌」	マリンバ	
12/19	「かえるの歌」	マリンバ	
12/26	「かえるの歌」	マリンバ	
1/2	「かえるの歌」	マリンバ	
1/9	「かえるの歌」	マリンバ	
1/16	「かえるの歌」	マリンバ	
1/23	「かえるの歌」	マリンバ	
1/30	「かえるの歌」	マリンバ	
2/6	「かえるの歌」	マリンバ	
2/13	「かえるの歌」	マリンバ	
2/20	「かえるの歌」	マリンバ	
2/27	「かえるの歌」	マリンバ	
3/6	「かえるの歌」	マリンバ	
3/13	「かえるの歌」	マリンバ	
3/20	「かえるの歌」	マリンバ	
3/27	「かえるの歌」	マリンバ	
4/3	「かえるの歌」	マリンバ	
4/10	「かえるの歌」	マリンバ	
4/17	「かえるの歌」	マリンバ	
4/24	「かえるの歌」	マリンバ	
4/30	「かえるの歌」	マリンバ	
5/7	「かえるの歌」	マリンバ	
5/14	「かえるの歌」	マリンバ	
5/21	「かえるの歌」	マリンバ	
5/28	「かえるの歌」	マリンバ	
6/4	「かえるの歌」	マリンバ	
6/11	「かえるの歌」	マリンバ	
6/18	「かえるの歌」	マリンバ	
6/25	「かえるの歌」	マリンバ	
7/2	「かえるの歌」	マリンバ	
7/9	「かえるの歌」	マリンバ	
7/16	「かえるの歌」	マリンバ	
7/23	「かえるの歌」	マリンバ	
7/30	「かえるの歌」	マリンバ	
8/6	「かえるの歌」	マリンバ	
8/13	「かえるの歌」	マリンバ	
8/20	「かえるの歌」	マリンバ	
8/27	「かえるの歌」	マリンバ	
9/3	「かえるの歌」	マリンバ	
9/10	「かえるの歌」	マリンバ	
9/17	「かえるの歌」	マリンバ	
9/24	「かえるの歌」	マリンバ	
9/30	「かえるの歌」	マリンバ	
10/7	「かえるの歌」	マリンバ	
10/14	「かえるの歌」	マリンバ	
10/21	「かえるの歌」	マリンバ	
10/28	「かえるの歌」	マリンバ	
11/4	「かえるの歌」	マリンバ	
11/11	「かえるの歌」	マリンバ	
11/18	「かえるの歌」	マリンバ	
11/25	「かえるの歌」	マリンバ	
12/2	「かえるの歌」	マリンバ	
12/9	「かえるの歌」	マリンバ	
12/16	「かえるの歌」	マリンバ	
12/23	「かえるの歌」	マリンバ	
12/30	「かえるの歌」	マリンバ	
1/6	「かえるの歌」	マリンバ	
1/13	「かえるの歌」	マリンバ	
1/20	「かえるの歌」	マリンバ	
1/27	「かえるの歌」	マリンバ	
2/3	「かえるの歌」	マリンバ	
2/10	「かえるの歌」	マリンバ	
2/17	「かえるの歌」	マリンバ	
2/24	「かえるの歌」	マリンバ	
2/28	「かえるの歌」	マリンバ	
3/6	「かえるの歌」	マリンバ	
3/13	「かえるの歌」	マリンバ	
3/20	「かえるの歌」	マリンバ	
3/27	「かえるの歌」	マリンバ	
4/3	「かえるの歌」	マリンバ	
4/10	「かえるの歌」	マリンバ	
4/17	「かえるの歌」	マリンバ	
4/24	「かえるの歌」	マリンバ	
4/30	「かえるの歌」	マリンバ	
5/7	「かえるの歌」	マリンバ	
5/14	「かえるの歌」	マリンバ	
5/21	「かえるの歌」	マリンバ	
5/28	「かえるの歌」	マリンバ	
6/4	「かえるの歌」	マリンバ	
6/11	「かえるの歌」	マリンバ	
6/18	「かえるの歌」	マリンバ	
6/25	「かえるの歌」	マリンバ	
7/2	「かえるの歌」	マリンバ	
7/9	「かえるの歌」	マリンバ	
7/16	「かえるの歌」	マリンバ	
7/23	「かえるの歌」	マリンバ	
7/30	「かえるの歌」	マリンバ	
8/6	「かえるの歌」	マリンバ	
8/13	「かえるの歌」	マリンバ	
8/20	「かえるの歌」	マリンバ	
8/27	「かえるの歌」	マリンバ	
9/3	「かえるの歌」	マリンバ	
9/10	「かえるの歌」	マリンバ	
9/17	「かえるの歌」	マリンバ	
9/24	「かえるの歌」	マリンバ	
9/30	「かえるの歌」	マリンバ	
10/7	「かえるの歌」	マリンバ	
10/14	「かえるの歌」	マリンバ	
10/21	「かえるの歌」	マリンバ	
10/28	「かえるの歌」	マリンバ	
11/4	「かえるの歌」	マリンバ	
11/11	「かえるの歌」	マリンバ	
11/18	「かえるの歌」	マリンバ	
11/25	「かえるの歌」	マリンバ	
12/2	「かえるの歌」	マリンバ	
12/9	「かえるの歌」	マリンバ	
12/16	「かえるの歌」	マリンバ	
12/23	「かえるの歌」	マリンバ	
12/30	「かえるの歌」	マリンバ	
1/6	「かえるの歌」	マリンバ	
1/13	「かえるの歌」	マリンバ	
1/20	「かえるの歌」	マリンバ	
1/27	「かえるの歌」	マリンバ	
2/3	「かえるの歌」	マリンバ	
2/10	「かえるの歌」	マリンバ	
2/17	「かえるの歌」	マリンバ	
2/24	「かえるの歌」	マリンバ	
2/28	「かえるの歌」	マリンバ	
3/6	「かえるの歌」	マリンバ	
3/13	「かえるの歌」	マリンバ	
3/20	「かえるの歌」	マリンバ	
3/27	「かえるの歌」	マリンバ	
4/3	「かえるの歌」	マリンバ	
4/10	「かえるの歌」	マリンバ	
4/17	「かえるの歌」	マリンバ	
4/24	「かえるの歌」	マリンバ	
4/30	「かえるの歌」	マリンバ	
5/7	「かえるの歌」	マリンバ	
5/14	「かえるの歌」	マリンバ	
5/21	「かえるの歌」	マリンバ	
5/28	「かえるの歌」	マリンバ	
6/4	「かえるの歌」	マリンバ	
6/11	「かえるの歌」	マリンバ	
6/18	「かえるの歌」	マリンバ	
6/25	「かえるの歌」	マリンバ	
7/2	「かえるの歌」	マリンバ	
7/9	「かえるの歌」	マリンバ	
7/16	「かえるの歌」	マリンバ	
7/23	「かえるの歌」	マリンバ	
7/30	「かえるの歌」	マリンバ	
8/6	「かえるの歌」	マリンバ	
8/13	「かえるの歌」	マリンバ	
8/20	「かえるの歌」	マリンバ	
8/27	「かえるの歌」	マリンバ	
9/3	「かえるの歌」	マリンバ	
9/10	「かえるの歌」	マリンバ	
9/17	「かえるの歌」	マリンバ	
9/24	「かえるの歌」	マリンバ	
9/30	「かえるの歌」	マリンバ	
10/7	「かえるの歌」	マリンバ	
10/14	「かえるの歌」	マリンバ	
10/21	「かえるの歌」	マリンバ	
10/28	「かえるの歌」	マリンバ	
11/4	「かえるの歌」	マリンバ	
11/11	「かえるの歌」	マリンバ	
11/18	「かえるの歌」	マリンバ	
11/25	「かえるの歌」	マリンバ	
12/2	「かえるの歌」	マリンバ	
12/9	「かえるの歌」	マリンバ	
12/16	「かえるの歌」	マリンバ	
12/23	「かえるの歌」	マリンバ	
12/30	「かえるの歌」	マリンバ	
1/6	「かえるの歌」	マリンバ	
1/13	「かえるの歌」	マリンバ	
1/20	「かえるの歌」	マリンバ	
1/27	「かえるの歌」	マリンバ	
2/3	「かえるの歌」	マリンバ	
2/10	「かえるの歌」	マリンバ	
2/17	「かえるの歌」	マリンバ	
2/24	「かえるの歌」	マリンバ	
2/28	「かえるの歌」	マリンバ	
3/6	「かえるの歌」	マリンバ	
3/13	「かえるの歌」	マリンバ	
3/20	「かえるの歌」	マリンバ	
3/27	「かえるの歌」	マリンバ	
4/3	「かえるの歌」	マリンバ	
4/10	「かえるの歌」	マリンバ	
4/17	「かえるの歌」	マリンバ	
4/24	「かえるの歌」	マリンバ	
4/30	「かえるの歌」	マリンバ	
5/7	「かえるの歌」	マリンバ	
5/14	「かえるの歌」	マリンバ	
5/21	「かえるの歌」	マリンバ	
5/28	「かえるの歌」	マリンバ	
6/4	「かえるの歌」	マリンバ	
6/11	「かえるの歌」	マリンバ	
6/18	「かえるの歌」	マリンバ	
6/25	「かえるの歌」	マリンバ	
7/2	「かえるの歌」	マリンバ	
7/9	「かえるの歌」	マリンバ	
7/16	「かえるの歌」	マリンバ	
7/23	「かえるの歌」	マリンバ	
7/30	「かえるの歌」	マリンバ	
8/6	「かえるの歌」	マリンバ	
8/13	「かえるの歌」	マリンバ	
8/20	「かえるの歌」	マリンバ	
8/27	「かえるの歌」	マリンバ	
9/3	「かえるの歌」	マリンバ	
9/10	「かえるの歌」	マリンバ	
9/17	「かえるの歌」	マリンバ	
9/24	「かえるの歌」	マリンバ	
9/30	「かえるの歌」	マリンバ	
10/7	「かえるの歌」	マリンバ	
10/14	「かえるの歌」	マリンバ	
10/21	「かえるの歌」	マリンバ	
10/28	「かえるの歌」	マリンバ	
11/4	「かえるの歌」	マリンバ	
11/11	「かえるの歌」	マリンバ	
11/18	「かえるの歌」	マリンバ	
11/25	「かえるの歌」	マリンバ	
12/2	「かえるの歌」	マリンバ	
12/9	「かえるの歌」	マリンバ	
12/16	「かえるの歌」	マリンバ	
12/23	「かえるの歌」	マリンバ	
12/30	「かえるの歌」	マリンバ	
1/6	「かえるの歌」	マリンバ	
1/13	「かえるの歌」	マリンバ	
1/20	「かえるの歌」	マリンバ	
1/27	「かえるの歌」	マリンバ	
2/3	「かえるの歌」	マリンバ	
2/10	「かえるの歌」	マリンバ	
2/17	「かえるの歌」	マリンバ	
2/24	「かえるの歌」	マリンバ	
2/28	「かえるの歌」	マリンバ	
3/6	「かえるの歌」	マリンバ	
3/13	「かえるの歌」	マリンバ	
3/20	「かえるの歌」	マリンバ	
3/27	「かえるの歌」	マリンバ	
4/3	「かえるの歌」	マリンバ	
4/10	「かえるの歌」	マリンバ	
4/17	「かえるの歌」	マリンバ	
4/24	「かえるの歌」	マリンバ	
4/30	「かえるの歌」	マリンバ	
5/7	「かえるの歌」	マリンバ	
5/14	「かえるの歌」	マリンバ	
5/21	「かえるの歌」	マリンバ	
5/28	「かえるの歌」	マリンバ	
6/4	「かえるの歌」	マリンバ	
6/11	「かえるの歌」	マリンバ	
6/18	「かえるの歌」	マリンバ	
6/25	「かえるの歌」	マリンバ	
7/2	「かえるの歌」	マリンバ	
7/9	「かえるの歌」	マリンバ	
7/16	「かえるの歌」	マリンバ	
7/23	「かえるの歌」	マリンバ	
7/30	「かえるの歌」	マリンバ	
8/6	「かえるの歌」	マリンバ	
8/13	「かえるの歌」	マリンバ	
8/20	「かえるの歌」	マリンバ	
8/27	「かえるの歌」	マリンバ	
9/3	「かえるの歌」	マリンバ	
9/10	「かえるの歌」	マリンバ	
9/17	「かえるの歌」	マリンバ	
9/24	「かえるの歌」	マリンバ	
9/30	「かえるの歌」	マリンバ	
10/7	「かえるの歌」	マリンバ	
10/14	「かえるの歌」	マリンバ	
10/21	「かえるの歌」	マリンバ	
10/28	「かえるの歌」	マリンバ	
11/4	「かえるの歌」	マリンバ	
11/11	「かえるの歌」	マリンバ	
11/18	「かえるの歌」	マリンバ	
11/25	「かえるの歌」	マリンバ	
12/2	「かえるの歌」	マリンバ	
12/9	「かえるの歌」	マリンバ	
12/16	「かえるの歌」	マリンバ	
12/23	「かえるの歌」	マリンバ	
12/30	「かえるの歌」	マリンバ	
1/6	「かえるの歌」	マリンバ	
1/13	「かえるの歌」	マリンバ	
1/20	「かえるの歌」	マリンバ	
1/27	「かえるの歌」	マリンバ	
2/3	「かえるの歌」	マリンバ	
2/10	「かえるの歌」	マリンバ	
2/17	「かえるの歌」	マリンバ	
2/24	「かえるの歌」	マリンバ	
2/28	「かえるの歌」		

つくる活動を通した、表現の広がりを追う

し発表を行うにつれ、評価も下がっていった。「毎回同じような内容の繰り返しでつまらない」と言った声や、「またかー」という声から、次時には、音のタイミングや音色の組み合わせ方、また、間についても話し合いながら何度も試す姿がうまれた。このように発表者と聴き手のやりとりの繰り返しから新たなものを生みだそうとする姿が見られた発表であった。子どもの発想を音楽として成立させるためには、教師の介入も必要不可欠になる。この事例の場合は、音の構成の大切さを提示し、結果試行錯誤しながら表現する姿につながっていったと言えよう。

図2のオリジナルシリーズにおいては、初め、キーボードを駆使し、様々な音色を重ね、作品をつくっていた。1回目の発表においては、賛否両論あった。「すごい！」と感じた児童や、逆に「わけがわからない」と感じた児童がいる。作品の時間が長すぎるといった意見や、もっと計画的につくったらという意見も多く出た。こうした批評空間の中で、もう一度自分の作品を見つめ直し、次なる表現へと活かしていく姿が見てとれた。こうした経験の積み重ねが、子どもたちの表現の幅を広げていく一つの要素となるのではないかと考える。同様な姿が図3図4の発表にも表れていた。特に図3の「いろんな音」は、キーボードの中にある音を順番に鳴らし、楽しむ活動であった。音から音楽へと変化させるためには、音楽要素を習得する必要があると感じている。

日にち	曲名	楽器形態	発表者
6/27	オレオレ	ピアノ	
6/29	友だちにならぬ	木琴	
7/1	いつも何處へ	木琴	
7/3	しゅっしゅっ	ピアノ	
7/5	かえるの歌	木琴	
7/7	とまりのトロ	マリンバ	
7/9	キラキラ	木琴	
7/11	ドラえもん	ピアノ	
7/13	メヌエット	ピアノ	
7/15	思い出の歌	ピアノ	
7/17	キャサリン	ピアノ	
7/19	ドラゴンクエスト	マリンバ	
7/21	トルコ行舞曲	ピアノ	
7/23	ドラえもん	ピアノ	
7/25	ドコ②	木琴	

図4

日にち	曲名	楽器形態	発表者
7/7	あたり前体操	うた	
7/9	けんけん	キーボード	
7/11	しゅっしゅっ	ピアノ	
7/13	キラキラ	木琴	
7/15	あたり前体操	うた	
7/17	スピード	ピアノ	
7/19	かいだん	太鼓	
7/21	鼻の牛乳	木琴	
7/23	山手線	ピアノ	
7/25	あたり前体操	うた	
7/27	甲子園	マリンバ	
7/29	甲子園	マリンバ	
7/31	アマリリ	木琴	

図5

日にち	曲名	楽器形態	発表者
7/3	さくら	うた	
7/5	小さな世界	マリンバ	
7/7	風の音	マリンバ	
7/9	ハルウタ	木琴	
7/11	甲子園	マリンバ	
7/13	キラキラ	木琴	
7/15	キラキラ	木琴	
7/17	キラキラ	木琴	
7/19	キラキラ	木琴	
7/21	キラキラ	木琴	
7/23	キラキラ	木琴	
7/25	キラキラ	木琴	
7/27	キラキラ	木琴	
7/29	キラキラ	木琴	
7/31	キラキラ	木琴	

図6

図5の「かいだん」は締太鼓を使って、階段を登ったり降りたりする様子を表現したものであった。この発表は2回行われたが、聴き手から「もう一回」という声のもと行われた。発表の様子は次の通りである。

発表内容：階段を登る様子を p → f で、降りる様子を f → p で表現した。

聴き手A：「階段を登るからだんだん音を小さくしたら？」

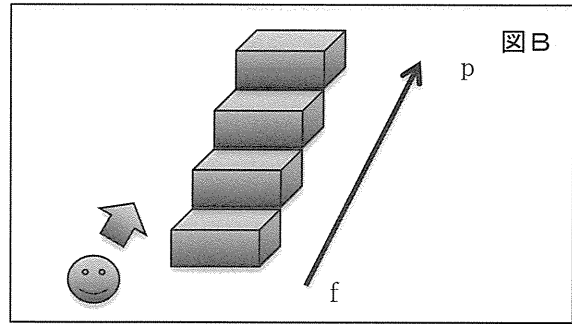
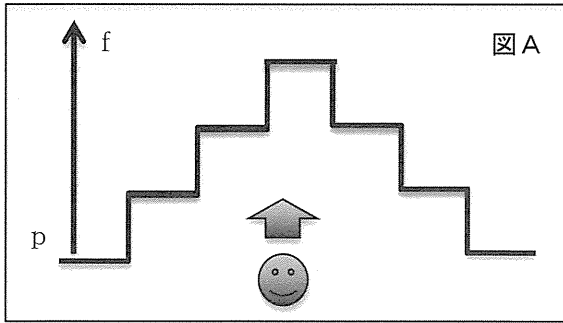
発表者：「だって、階段を登るから、上に行くから強くしたんだよ！」

聴き手B：「なるほどなるほど」

聴き手A：「だって、階段を登ると遠くなるから、足音も小さくなっていくよ」

聴き手C：「もう一度やってみたら？」

以上のようなやりとりがこの発表ではあった。このやりとりからは、二つの視点があることがわかる。一つは、階段の登り降りを第三者的視点で捉えている（図A）。もう一つは実際に自分をその世界に居るものとして捉えた聴き方であろう（図B）。



図Aの聴き方は、階段の下と上を「下が弱く、上が強く」と捉えたのであろう。一方図Bの聴き方は、自分との距離を音の強さで捉えた聴き方であると言える。どちらの聴き方もその場にいた児童に取っては新しい発見であり、結果発表者は二回目の演奏で、図Bの演奏を行った。二つの演奏を聴き比べることから、表現方法は一つではないことや、多様な捉え方があることに気づく事ができたと言える。

図6の「たつきゅう」では、2人の児童が1人1台のキーボードを使って発表を行った。同じ音色でピンポン球がはねる様子を表現したものであったが、時間軸のズレを利用した作品であった。キーボードのアルペジエーター機能を発見し、「これは使える！」と思い、取り入れたのである。発表後の子どもたちのつぶやきからは、「本当に卓球をしているような感じがした」「ピンポン球があっちに行ったりこっちに来たりする様子がわかった」という肯定的な意見がある一方で、「もっと、音の強さを工夫してみたら?」「ずっと同じ速さでピンポン球は動かないから、遅くしたり速くしたりしてみたら?」などのアドバイスも出てきた。前時までのたくさんの発表を聴きあう中で、子どもたちは自然と音の強さに意識を持ったり、音楽の速さに意識を持ったりすることが出来ている事がわかる発言であった。このような、ひとつひとつの発表が相互的に作用することは、表現する中での様々な音楽要素の習得につながっていると見えるだろう。

図7の「ダークてつわんアトム」では、長調、短調を意識している姿があった。図7の児童は4年生になりピアノに興味を持ち、4年当初からずっとピアノに向かっている。特に、電車の発車音（駅によって異なる音楽）に興味を持ち、「鉄のバイエル」を購入し、黙々と取り組んでいる。ひとつ出来たら、仲間に聴いてもらいを繰り返してきた。ある時、つくる活動の中で、教師の次のような提示があった。「何もない状態からつくるのもよし。もしくは、今ある曲を少し変えてやってみるのもいいよ。例えばあるひとつの音だけを変えて演奏してみるとどうなるか(実演する)」この教師の提示から、色々と試し、短調に近づけていった。同主調に変調させることは、楽典を既習していれば出来るが、小学校段階で必ずしも習得する必要はない。しかし、変化できることを何となくでも体験することは、今後の音楽活動に大きく幅を持たせることにつながる。

曲名	調性	演奏形態	発表者
100% 夏風 1	長調	ピアノ	
無名 3年生	長調	ピアノ	
浦田行進曲	長調	ピアノ	
勇気100% 2	長調	ピアノ	
飛翔 3年生	長調	ピアノ	
もりのうた	長調	ピアノ	
ササエササ (4年生)	長調	ピアノ	
つるねの歌	長調	ピアノ	
剣の舞	長調	ピアノ	
無名 3年生	長調	ピアノ	
100% 夏風 1	長調	ピアノ	

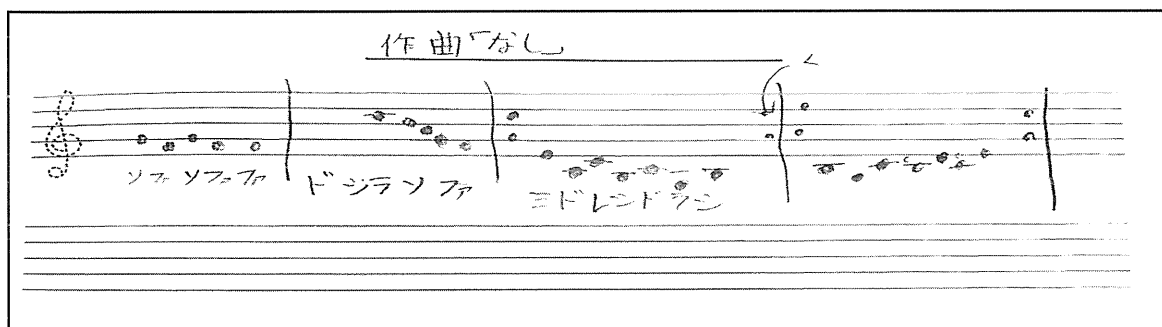
図7

以上のように、つくる活動に焦点を当てて述べてきた。このミュージックプランに基づく学習のなかでは、第一に、子どもがうみ出す表現を受け入れる教師の姿勢が重要になってくる。中には、音楽的に疑問を持つものもある。しかし、どんな音楽も排除せず、ひとつの作品として受け入れるからだは、表現を広げるためにも必要不可欠になるであろう。ふとした子どもの発表から、音楽要素であったり、技法であったりと、習得できるものが広がってくる。この学びの場を保障することも子どもたちの表現を広げる一因となることは明らかになりつつある。

つくる活動を通した、表現の広がりを追う

(4) こだわりつづけた作品

図1の「作曲」これを発表したのはS児とK児が中心であった。3年生の時から楽器に興味を持ち始め、4年生になり、使える楽器が増えたことから、4月当初からマリimbaに没頭していった。マリimbaをうまく弾こうというねらいではなく、マリimbaの音を使って表現していこうとする姿が多く見られた。そして、自分たちで曲を作ることに目覚めていったのである。「どんな曲でも世界にひとつだけかもしれないよ！」という言葉から、今まで以上に意欲がわき、仲間とともに考え、試しながら、つくりあげていた。毎時間少しずつ進め、試行錯誤している姿は印象的である。以下の写真は、音楽ノートを用いて、制作の記録を残したものである。



当初、「ソファソファファドシラソファ」までの2小節の作品であった。3小節目の「ミドレシドラシ」の部分で葛藤が起きた。そこでは次のようなやりとりがあった。

S：「なんか違う。」

K：「どこが??」

S：「ミドレシドラシの後どうしよう。」

教師を呼んできて相談

S：「なんか、ここ（3小節目）はもっと長くしたい」

T：「長くしたいって?」

S：「すぐに終わっちゃうからさ」

T：「2人でやっているんだよね? そうしたら分担してみたら?」

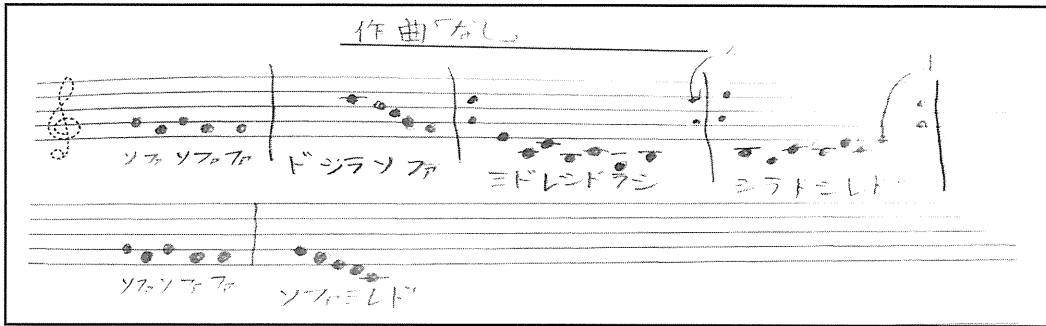
K：「分担って、ひとつひとつの音を分担するの?」

T：「そのようにも出来るし、例えば、カノンでやることも出来るんじゃない? あとは、ひっくり返してみても良いんだよ! とりあえずどれが正解とか無いから、色々試して、自分たちで選んでごらん。」

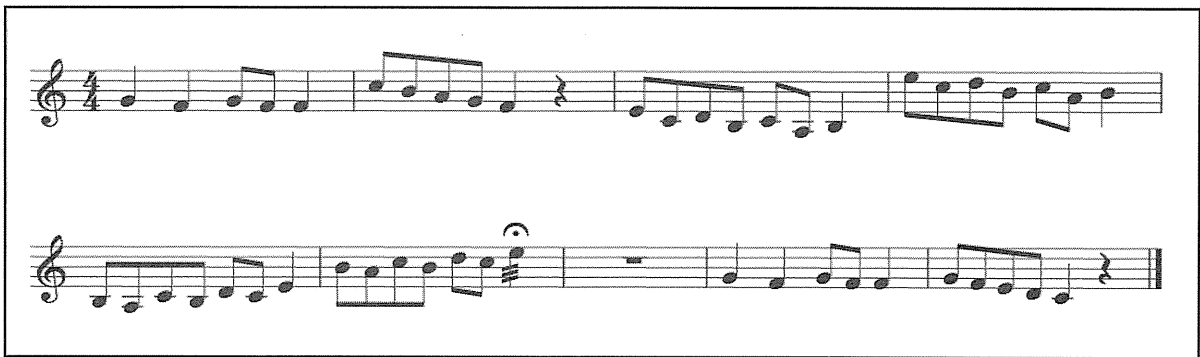
この後、「反復」を選択し、音高を工夫して3小節目及び4小節目をつくりあげた。また、3小節目から4小節目にかけては、「逆行」を用いていることがわかる。教師の音楽観で子どもの音楽をつくることは簡単なことであるが、ここで重要だと感じたことは、子どもたちに選択肢をいくつか投げかけることである。「このようなやり方もあるよ」といくつか提示する中で、子どもたちは、もっとも自分たちが納得いくものを選ぶ。教師は、子どもの実態に合わせ、適切なアドバイスを選択する必要があることが再確認できた。

曲を終わりにしたい、という気持ちが表れた時、子どもたちは、新たな悩みを抱いた。相談を重ね、何回も試し、時には、友だちに聴いてもらいアドバイスを受け、完成した曲が以下の譜例である。

下段の2小節を最後にもってきた。初めの1小節をもう一度繰り返し、リズムは2小節目と同じものを採用している。モチーフをうまく使って最後を締めくくっている。



この曲が出来上がるまでにはおよそ、4ヶ月ほどかかっている。しかし、彼らにとっては、一から自分たちで作った曲であると同時に、初めての作曲活動であった。採譜に関しては、今後身につけてほしい要素はたくさんあるが、彼らのオリジナルの楽譜が完成したのである。このつくる過程においては、たくさんの音楽要素を習得することも出来たと言える。参考のため以下に浄書した譜面を載せておく。



2 ミュージカルをつくろう

(1) 題材について

2学期に入り、11月22日の全校音楽会に向け、少しずつ取り組み始めた。

本題材においては、学年全員でひとつの音楽作品をつくること、子どもたちのアイデアからオリジナルのミュージカルをつくりあげることがねらいである。そのつくる音楽活動の中には、セリフ、効果音、場面をつなぐ音楽などをつくる活動も含まれている。特に音を探して、その音がミュージカル全体の中で、どこにフィットするか、友だちとの音の交流を通して、試行錯誤しながら活動する姿に着目し、最終的な形が生まれてくれば、と考える。

このミュージカルの役割としては、役者、ピアノ、マリimba、鉄琴、キーボード、リコーダー、うた、効果音などの音づくり、大道具小道具などが挙げられる。学年全体でひとつの作品をつくるなかで、個々が、任された役割に対し、責任を持って取り組む姿勢を育てたい。どのポジションも作品の一部を担っているということに、子どもたち自身が気づき活動してほしいと願う。

また、音をつくる活動においては、たくさんの音に触れる経験を大切にしたい。このような活動経験が出来る場を保障するとともに、他者との表現交流を通じた自己実現にむけ、音楽経験を積み重ねてほしい。

(2) 学習計画 (全18時間)

- ・ミュージカルの全体構想を考える
- ・自分の役割を選び、任された役割に対し責任を持って取り組む
- ・場面を想像して、音を見つけたりつくったりする
- ・ミュージカルの流れを理解し、適当な表現を考え、試してみる
- ・全校の児童・保護者の中で、発表する

③ 背景画・小道具づくり

台本ができあがり、子どもたちが自分の中で、ミュージカルのイメージを膨らませていった。その中で、大道具や小道具はどうするのかといった、気づきが生まれた。担当に立候補した子どもたちは多くはなかったが、自分たちもこの作品づくりの一部を担うんだという意気込みが強く感じられた。先に述べたようにスモール（1998）は、すべての音楽活動がミュージッキングであると述べている。もちろんこの背景画を描くことや携帯電話などの小道具を作ることも音楽活動に含まれると考える。休み時間に子どもたちが自分の考えを出しながら、また、役担当の子どもたちと相談しながら活動していた姿は、この作品に対する責任感を強く感じた。

④ 歌詞づくり

本題材においては、歌で場面を伝えていこうというコンセプトも含まれている。従って、楽曲もオリジナルである。しかし、小学4年生の段階で、歌のメロディまでつくることは時間的にも厳しく、メロディ及び編曲は教師が担当した。作曲にあたっては、授業の中で、子どもたちに日常生活の中で感じていることや、学校生活の中での事など、たくさんの言葉を拾い、構成した。その後、歌詞を載せる作業へと移っていった。子どもたちからは、自分たちの実体験と照らし合わせながら、試行錯誤する姿が見てとれた。そして、計4曲が出来上がったのである。既存の曲を用いることも出来るが、今回オリジナルにこだわった意図は、子どもたちの創造性を大いに発揮してほしいという教師の願いからきている。結果どのような学びや気づきが子どもたちに生まれたかは、今後継続的に観察していく必要がある。

<p style="text-align: center;">学校SONG</p> <p style="text-align: center;">©N.MACHTSIS</p>	<p style="text-align: center;">イヤだ!!!</p> <p style="text-align: center;">©N.MACHTSIS</p>	<p style="text-align: center;">未来からの贈りもの すずむず</p> <p style="text-align: center;">©N.MACHTSIS</p>
---	---	---

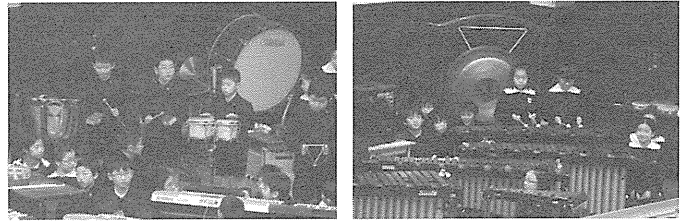
⑤ 本番の様子

音楽会当日は、非常に緊張した表情が印象的であった。言い換えれば、自分の役割に責任を感じていたのであろう。大きく捉えれば学年の作品であるが、細かく見ていくと個々が責任を持って自分の役割こなし、その個の集まりが集団としての作品をつかっていく。ひとつでも欠ければ作品にならないことは、練習を通して、子どもたち自身が習得していた。本番は計2回演じた。午前中は、全校児童と低学年の保護者が一堂に集い、お互いの表現を聴きあった。そして、午後は、3～6年生の保護者とひと



つくる活動を通した、表現の広がりを追う

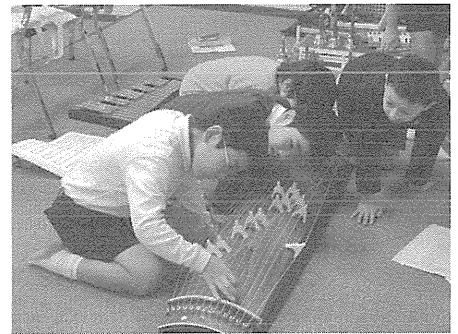
つ上の学年の児童の前での発表である。どちらの発表も自分たちが今できる限りの力を発揮できたのではないか。そして、聴き手の反応も楽しんでいる姿があった。練習では味わうことの出来ない感覚や、聴き手の反応。それらは、今後の音楽活動の糧になると言えるだろう。今後もこうした経験を積み重ねることで、個々の表現に広がり（幅）が出てくると考える。



⑥ 音楽会後の子どもたちの姿

音楽会を終え、子どもたちの表情からは、満足さがみてとれた。同時に高学年の演奏を聴き、今後の憧れを口にする子もいた。

ミュージックプランに基づく学習では、さらなる表現を追い求めようとする姿がある。例えば、音楽会で自分たちが考えた音楽を発表したS児やK児は、新たな作品づくりに取り組んでいる。また、その様子を近くで見たり聴いたりしていた子どもたちは、自分たちも何かつくって表現しようと意気込んで自分たちの活動をしている。他には、他学年の発表から影響を受け、箏に取り組み始める姿や、得意なマリンバに没頭する姿もある。このような子どもの姿からも、相互作用的に表現が広がったと考える。



V 今後の展望と課題

本稿では、第4学年における「つくる活動」について、普段の授業実践から見つめ直し、分析・考察を行った。「何かつくることができないかな」という、ふとしたきっかけから始まった活動。はじめは、何となく活動していたが、次第にこだわりを見せ始め、没頭していく姿が印象的であった。一人から二人へ、二人から三人へと、関わりも広がり、お互いが触発されながら、音楽活動を営んできたと言える。このような営みは、本校音楽部の研究テーマである「つながりを深めるミュージッキング」がねらう子どもの姿と捉えることができると同時に、子どもたちにとっては、表現の広がりを感じるできていたのではないか。「つくる＝作曲」と子どもたちは勘違いしている実態に出会う事が多い。作曲活動となれば、和声をはじめ、様々な音楽知識を要するが、小学校段階での「つくる」は子どもたちの思いを音で表していくことが重要であると考え。プロセスは子ども一人ひとり異なって当たり前だが、前提には「間違いは存在しない」ことを今後も子どもたちに伝えていきたい。また、「音」から「音楽」へつなぐための橋渡しは、現段階では、教師が行う必要があると感じた。いくつかの方向性を示していくことが、子どもにとって、表現の広がりにつながっていくであろう。今後もこのような表現の場を保障し、絶えず音楽している空間を追い求めていきたい。

【引用・参考文献】

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社

Christopher Small（1998）『Musicking: The Meanings of Performing and Listening, 訳：野澤豊一十

西島千尋（2011）』水声社

初等科音楽教育研究会（2011）『最新 初等科音楽教育法 [改訂版]』音楽之友社